

32

中山城山の『黄庭内景経略註』について

坂出 祥伸

森ノ宮医療大学

『黄庭経』は中国・六朝時代の道教上清派の重要な経典であり、これには『内景経』『外景経』という二種がある。両者は成立時期と長短の違いである。そのいずれにせよ、基本的な思想は黄庭（土・脾臓）に住む神を中心とする五臓をはじめ体内に住む神々を存思（イメージ）することによって、五臓の気の調和を図って病気を予防し、ひいては不老長生を得るという立場である。

伝説によれば、書聖とも称される王羲之が永和12年（356）のこと、『黄庭経』を書き写し山陰（浙江省）の道士に与えて鷺鳥と交換したという逸話があり、その『黄庭経』は『外景経』であったと言われている。我が国では書家の間で『黄庭内景経』の名はつとに広く知られていたらしく、森大年（東郡）の校訂による『黄庭内景玉経』が明和元年（1764）に刊刻されている。これは今、武田薬品杏雨書屋に蔵せられているが、これとは別に、北里研究所附属東洋医学総合研究所医史学研究室にも、三木栄旧蔵の森立之旧蔵、森約之校訂、佐伯理一郎旧蔵本、及び同じく三木栄旧蔵の森東郭自筆手訂本が所蔵されている。

ここで『黄庭経』が道教経典にとどまらず、中国の伝統医学と密接で深い関係を有していることを指摘しておきたい。かつて麦谷邦夫氏が論文「黄庭内景経試論」（『東洋文化』第62号、1982）で考察しているように、存思の対象である五臓神説は『黄帝内経素問』『黄帝八十一難経』の医説を基礎としているのである。

次に、中山城山についてであるが、江戸時代の高松藩の人で、宝暦13年（1763）香川郡横堰里（よこいむら、今の高松市香南町横井）に、医者であって農業をも兼ねていた中山熊二郎の長男として生まれ、諱を鷹（よう）、字を伯鷹といった。城山の号は後年、阿野（あや）郡にある城山（きやま）に因んで師・藤川東園から与えられたものである。その学問は、三谷村（今、高松市三谷町）に塾を開いていた藤川東園（1739～1806）に入門し、彼から荻生徂徠の流れを継ぐ古文辞学を学び、また医学をも学んでいる。当時の高松藩の学問は朱子学であり、岡内綾川が文政10年（1827）、講道館総裁となっている。従って朱子学に傾倒しない城山ら古文辞学の学者は藩から疎んじられていた。

城山の学問の範囲は『論語徴考』などの徂徠学を祖述敷衍した儒学、『傷寒論探頤』（45歳頃の著述）などの医説、『全讃史』などの郷土史・国史、さらに仏教にも深い造詣をもっていたが、『三教一帰論』（文政9年、1826）に示されているように儒教・仏教・国学（神道）三教は究極的には同一に帰するという態度である。天保8年（1837）75歳で亡くなった。

城山の『黄庭内景経略註』（関西大学図書館泊園文庫所蔵藤沢東咳手写本）には天保6年（1835）の自序があり、晩年の73歳の著述と分かる。刊本にはなっていない。これとは別に高松・公益会所蔵城山自筆稿本があり、その表紙には『仙家黄庭経秘注』と題する題箋が貼られている。

城山は『黄庭経』を道家の神仙説と見なしてはいるものの、五臓神存想法にもとづく神仙説とは考え及んでいない。全体を道教の行気法・調息法と見ている。しかしながら、彼は医者であるが故に、ままた医説による注釈、特に我が江戸時代の医説による独特な解釈が見出せる。例えば「是れ神仙行気の要道、道家延年の秘奥なり。若し一気留滞せば、則ち病と為る」という、古医方派の医説による説明が見られる。発表では、こういう点をやや詳しく紹介したい。